物言う雑草／ツユクサと焼畑民の記憶
―ラオス北部と南九州の比較から―

川　野　和　昭

Ⅰ　はじめに～「物言う雑草／ツユクサ」との出会い

1993年５月４日，熊本県五木村から鹿児島民俗学会に委託された五木村民俗調査団の一員として，五木村出羽集落に白石スギ媼を訪ねていた。スギ媼は，コヤシ（家の周囲の常畑）で草取りをしていた。「コバで一番困る草は何ですか」という私の問いに，「それはハナガラよ」という答えに次いで，この草は，日に干しても枯れない草で，人間を脅迫し，愚弄しているとも受け取れる言葉を発する草だと教えてくれたのである。焼畑民たちの諦念的で受動的な雑草に対する受け止め方に深い驚きを覚え，さらに，その草の正体がツユクサであると知ったときには，その愛らしい花と脅迫の言葉との落差に，再び深い感動を禁じ得なかったのである。

鹿児島に帰るなり小野重朗先生のお宅を訪ねて「先生，人間を脅す雑草がいました」と報告すると，「物言う雑草。面白いね。調べてみたら」という助言をいただいたが，その後なかなかデータの積み上げができないままにいた。

それが大きく展開し出したのは，2002年に総合地球環境学研究所研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究1945－2005」（プロジェクトリーダー秋道智彌）の共同研究員として，ラオス北部で「竹の焼畑」調査の機会が与えられてからである。日本列島ではなかなか聞き出せなかった伝承が，民族の枠を越えて普遍化していることに出くわすことになった。さらに，2007年から総合地球環境学研究所研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき―ユーラシア農耕史と環境―」（プロジェクトリーダー佐藤洋一郎）への参加を許され，ラオス北部での「竹の焼畑」調査の機会が再び与えられ，調査地域の拡大と調査データの充実への道が開かれてきた。

ここでは，両地域で収集した「物言う雑草」のデータを比較しながら，日本列島における「物言う雑草」の文化史的な意味について考えてみたい。また，それをとおして民俗学の「聞き書き」という方法の有効性と，地域民俗学の課題と可能性についても考えてみたい。先ず，「物言う雑草／ツユクサ」に関する両地域の事例から見ていくことにする。

Ⅱ　日本列島に於ける「物言う雑草」の諸相

日本列島に於いては，「物言う雑草／ツユクサ」の例と，「物は言わず枯れずに蔓延る雑草／ツユクサとを語る事例が認められる。

１　「物言う雑草／ツユクサ」の事例

(1)　鹿児島県肝属郡佐多町（現南大隅町）打詰

「ツユクサ」は，ニセコバ（２年目の焼畑）に出てくる雑草で，引き抜いて石の上に置く

と人間に向かって，次のように嘯く。

「三日もすれば，雨なしとふいじゃろ（三日も立てば，雨でも降るだろう）」

(2) 熊本県球磨郡五木村出羽

焼畑で一番困る草は「ハナガラ」という草である。この草は，除草すると人間に向かって次のように言って，脅迫する。

「ヤケバ　フシナットノコロ，イクレバ　クエフカソ，カワニナガセバ　ヤナギニトマロ（俺を引き抜いて燃やせば，一節だけでも生き残ってやろう。俺を引き抜いて土の中に埋めれば，焼畑地を崩壊させてやろう。俺を引き抜いて川に流せば，柳の根っこに引っかかって，また生き延びて増えてやろう）」

(3) 熊本県球磨郡五木村下梶原 1

「ハナガラ」は，畑（コバ）には，やっかいどころではない。とてもふゆっでな。伐り株の高い上に乗せておいても枯れるもんじゃなか。この草がいないよう（いなくなるよう）に，細んかうちに取ってメゴ（目籠）に入れて，サク（作）せん所に捨てる。この草は，人間に向かって次のように言って，脅迫する。

「イクレバ　イッカ　クエノ　ヒキダスド，ヤケバ　ヒトフシナッ　トノコロ（コバの土の中に埋めたら　いつかそのうち　山崩れが起きて　この世に再び俺を引き出すだろう　焼けば一節でも生き残ろう）」

(4) 熊本県球磨郡五木村下梶原 2

「ハナガラ」は，どげんなったっちゃ枯れるもんじゃなか。小積み焼き（燃え残りを集めて再度焼くこと）の中に入れても，一節は残っているものである。「ハナガラ」のコバいっぱい這ったなら，稗でも粟でもせっ殺す。この草は，人間に向かって次のように言って，脅迫する。

「イシノウエニオケバ　イツカカゼノ　フククワス　キノウエニオケバ　イツカカゼノ　フククワス　イクレバ　クエノヒク　カワニナガセバ　ドッカ　ヒッカカッテ　マタフエッ　ヤイタッチャ　ヒトフシノコル（石の上に置いたら　いつか風が吹き返して地面に落とすだろう。木の上に置いたら　いつか風が吹き返して地面に落とすだろう。土に埋めたら　山崩れが起きて　この世に再び引き出すだろう。川に流したら　何処かに引っかかって　また増えてやる　焼いたところで　一節だけでも生き残る）」

(5) 熊本県球磨郡五木村栗鶴

「ハナガラ」は，なかなか枯れない草である。今でもコンクリートの舗装の上に置いて枯らす。この草は，人間に向かって次のように言って，脅迫する。

「カワニナガシテモ　ナニカニツカマッテ　ヒトフシナトノコロ（川に流しても　何かに引っかかって　一節だけでも生き残ろう）」

(6) 宮崎県西都市大字八重（旧東米良村）

「ハナガラ」は，なかなか枯れんで，増えて及ばん草である。引き抜いて木の上や石の上に置いておいても，人間に向かって次のように嘯き，騙す。

「尻が火照(ほせ)て良いばっかり（お尻｛根っこ｝が陽に当たってほかほかと火照って気持ちが良いだけである）」

(7)　宮崎県西都市大字上揚

「ハナガラ」は，横に這うので作物の邪魔になる。引くときも気を付けて引かんと，一節残れば駄目である。引いて川に流すが一番良い。

この草は，「引いて　川に流せば　一節でも　残ろ（残ろう）」，「焼いても　一節でも残ってやる」と，人間に向かって言う。

(8)　宮崎県児湯郡西米良村大字板谷―1

「ハナガラ」は，コバを作る人からは，枯れんじ，憎まれもんじゃ。木の枝，木の上，石の上に置いても，人間に向かって次のように嘯き，脅迫する。

「いつかは，あえて，また増えてやる（いつかは地面に落ちて，また増えてやる）」

(9)　宮崎県児湯郡西米良村大字板谷―2

「ハナガラ」は，コバを作っていた時代には，この草を取ったら，畑の外に出せと親に言われるもので，畑から引いて川に流すものであった。

この草は，引いて石の上に上げていると次のように嘯く。

「いつかは，雨が降っじゃろう（そのうちいつかは雨が降るだろうから，また生き延びてやる）」

川に流せば次のように嘯く。

「どっかに　引っかかっじゃろ（流されても何処かに引っかかるだろうから，また生き延びてやる）」

木の上に置いておくと次のように嘯く。

「いつか　風が吹くじゃろう（そのうちいつか風が吹くだろうから，地面に落ちてまた生き延びてやる）」

(10)　宮崎県児湯郡西米良村大字小川・助八重(たすかるばえ)

「ハナガラ」は，地中に埋めとけば腐るが，ちょっとでも芽が出ていると横にのんで（延びて），作の外になりおった。特に，ヒエ（稗）が苗のうちに「ハナガラ」に覆われると，立ち枯れになってしまう。一夏2回くらい草取りをするが，引き抜いた「ハナガラ」は，ヤボ伐り（焼畑の伐採）のときに木を背丈くらいの高さに伐ったキチクイに掛けておくものであった。

この草は，キチクイに掛ければ「いつか風の吹くじゃろう」，ヨセヤキ（キヤキとも言い，焼き残りの木を寄せ集めて焼くこと）にくべる（火の中に入れる）と「一節なと残ろ（残ろう）」と，人間に向かって言う。

(11)　宮崎県児湯郡西米良村大字越野尾―1・礇石(されい)

「ハナガラ」は，性強い草で，本当に困った草である。どうにも始末に困る草で，畑でない遠いところに持っていって捨てる。

この草は，木に掛けておけば「眺めが良いなあ」，川に流せば「どっかで　ほうて（這っ

て）上がるから」と，人間に向かって言う。

⑿　宮崎県児湯郡西米良村大字越野尾―２・小平

「ハナガラ」は，引き抜いても切れて残り，花は花で実が出来て増える。火を焚いて焼くか，そうせんば（そうしなければ）蔓延る。

この草は，「焼いても　一節残る」，「川に流せば　何かに引っかかって　また増える」，「木の上に乗せれば　風の吹いて落つる（落ちる）」と，人間に向かって言う。

⒀　高知県吾川郡池川町椿山

「カマツカ」は焼畑の敵である。この草は人間に向かって次のように嘘をついて騙す。

「三千日の日照りより　一寸の土の下が怖い」

⒁　愛媛県東温市

「ツユクサ」は人間に向かって次のように嘘をついて騙す。

「木の枝に　三年休んで　涼しかった」

2　物言わないツユクサ／枯れずに蔓延る雑草の事例

(1)　宮崎県東児湯郡椎葉村大河内

「ハナガラ」は，畑に生えていて，根こぎしますわ。枯れないと思って茶の木の上に置いても，下に延びて生き返る。だから燃やしております。燃やしばしせんと枯れん。畑の草でも，この草だけは取って，ナイロン袋に入れて，腐らしている。そうせんと絶えん。

(2)　宮崎県東児湯郡椎葉村大藪

「ハナガラ」は，どうにもならん草である。少しでも残っていたら節から根が出て，余程のことがない限り枯れない。ヤマサク（焼畑）の時は，引き抜いて籠に入れて畑の外に運び出し，石の上に乗せるものであった。石の上に置いても，下の方に少しでも湿気があれば生き返る。

(3)　宮崎県東児湯郡椎葉村大藪

「ハナガラ」は，朝にいっぱい露が付くのでツユクサとも言う。百姓にとって一番悪い草である。どうにも，節ごち根が出てくる。二つ葉のうちに抜き取らんと，どうにもならん。そうせんと，（ヤマサクでは）ヒエ，アワを一町も一町五反も作っていたものだから，取り抜いていないと太りが早いものだから，２ｍも這っていくのでどうにもならん。

(4)　島根県美濃郡鎌手村・種村

「カメガラ」は，除草しても夏の暑い日「三日も死に顔を見せない」と云われ憎まれて居る。真砂村でも一ヶ月も枯れずと云う。（内藤喬『鹿児島民俗植物記（遺稿）』同書刊行委員会編・昭和39年）

(5)　石川県白山市

「ハナガラ」は，どうにもならない草で焼畑の敵（かたき）である。焼畑の中に１本でもあったら抜いて，腰の籠に入れて畑の外に持ち出して，背の高い草の上に置いたり，川に流したりした。１年目にこの草を取り残すと３年目には蔓延って，植えた小豆は全く穫れないことがある。

Ⅲ　ラオス北部の「物言う雑草」の諸相

ラオス北部の焼畑民の間にも，日本列島と同様に「物言う雑草」／ツユクサと，物言わないツユクサ／枯れずに蔓延る雑草の伝承が強く認められる。

1　「物言う雑草」の事例

(1)　ルアンパバーン県ナムバック郡コックナン村（タイルー族）

川の近くの畑には，ニャーパッカップが生える。この草は蔓のように這う草である。太陽の光の多いところには蔓も白く花も白いものが，太陽の光の少ないところには蔓も紫で花も紫のものが生える。

この草は，「もし俺を抜いて石の上に置いたら，畳のようないいところに座れるね」と言い，「俺を抜いて伐り株の上に置いたら，俺は馬の背中に乗っているみたいで気持ちがいいよ」と言って，本当は死ぬくせに気持ちがいいと言って人間を騙す。

また，「俺を抜いて水に流しても，舟に乗っているみたいで，どこか岸に立ち寄って，また増えていくよ」と言い，「俺を抜いて大きい穴を掘って埋めても少し根が残ってまた増えていくよ」と言って，人間を脅迫する。

(2)　ルアンパバーン県ゴイ郡ラッエン村（ラオ族）

焼畑の除草は，６月に入り芽が10㎝ぐらいに伸びたころに１回目，７月に２回目，８月に３回目を行う。２回目まではウエッ（手鍬）で行い，３回目はキョルアン（鎌）で行う。

焼畑の草で困るのは，ニャンドックルアン，ニャーカッピー，ニャーキュー，ニャーカッなどがある。

このうち，ニャーカッピーは人間をだます。「もし俺を伐り株の上に置いたら馬に乗った気分になる（涼しくて気持ちがよい）」と言い，「もし俺を火に燃やしたら３月の太陽ぐらいに寒い気分になる（本当は熱くて死ぬ）」と言う。

(3)　フアパン県ソップバオ郡ナースン村（タイデン族）

草取りは３回行う。１回目はワイ・ニャー・ファイ（取る・草・火）と呼んで，稲の背丈が10㎝～15㎝ぐらいに成長したとき，２回目はワイ・ニャー・ルン（取る・草・大きな）と呼び，稲の背丈が人の膝の高さぐらいに成長したとき，３回目はルワン・ハイ（大きな草・焼畑）と呼んで，稲が妊娠したときに蔓性の草や背丈の大きな草をキヨ（鎌）で刈り取る。

ニャーカップという草は，とても憎い草である。この草は次のように言って人間を騙す。

Wai	Khun	Lamkhone	Pan	Dai	Khii	Maa
草を取る	乗せる	倒木	～のように	～できる	乗る	馬

Ao	Khun Vai	Towmai	Yai	Pan	Dai	Weung	Lai	Meung
置く	乗せる	切り株	大きい			見える	たくさん	町

(4)　フアパン県ソップバオ郡ポンバオ村（タイデン族）

ニャーカップという草は，次のように言って人間を脅迫し，騙す。

Thim	Sai	Nam	Boh	Lai
捨てる	～に	水	～しない	流れ

Sai Fai Boh Mai
火 燃える

Sai Tow Saam Dai Khii Maa
置く 木株 ～のように ～できる 乗る 馬

Sai Kong Haa Fing Det Yamnao
燃え残り焼き 陽に当たる 太陽 冬(寒い季節)

(5) **フアパン県ソップバオ郡ナーメーンタイ村（タイダム族）**

除草は４回する。１回目は稲の背丈が10cmぐらいに成長したとき，２回目は稲の背丈が人の膝位の高さに成長したとき，３回目は稲の背丈が人の膝位の高さより高く成長したとき，４回目は稲の穂が出る前に行う。

ニャーカップという草は，次のように言って人間を騙す。

Sai Kong tow khuu Dai Khii Maa
置く 伐り株 ～のように ～できる 乗る 馬

Sai Kong Haa Saam Dai noun weng
燃え残り焼き ～のように ～できる 昼寝

(6) **フアパン県サムタイ郡タオ村（タイデン族）**

焼畑で一番困る草はニャーカップという草で，除草を怠ったり，除草が間に合わなかったりすると，稲が収穫できなくなる。この草は，次のように言って人間を騙す。

goi Kong ghuu Dai Khii Maa
載せる 倒木 ～のように ～できる 乗る 馬

khao Kong Haa ghuu Fing Huai Nyamnaon
入れる 燃え残り焼き 火に当たる 焚き火 冬(寒い季節)

(7) **フアパン県サムタイ郡ナムクワン村（タイデン族）**

除草は３回する。１回目は稲の背丈が15cmぐらいに成長したとき，２回目は稲の背丈が人の膝ぐらいの高さ（40cmぐらい）に成長したとき，３回目は稲の穂孕みの時期に行う。

ニャーカップという草は，次のように言って人間を騙す。

Thim Sai Kong Pan Dai Khii Maa
捨てる ～に 倒木 ～のように ～できる 乗る 馬

Thim Sai Kong Haa Pan Dai Fing Det Nyamnao
燃え残り焼き 陽に当たる 太陽 冬(寒い季節)

(8) **フアパン県サムタイ郡ナラ村（タイデン族）**

除草は３回する。１回目は稲の背丈が10cmぐらいに成長したとき，２回目は稲の背丈が人の膝ぐらいの高さ（30cmくらい）に成長したとき，３回目は稲の穂孕みの時期に行う。

ニャーカップという草は，次のように言って人間を騙す。

Sai Khum Fai Meuan Dai Khii Maa
入れる 燃えている 火 ～のように ～できる 乗る 馬

Sai	Kong Haa	Meuan	Dai	Fing	Det	Nyamnao
	燃え残り焼き			陽に当たる	太陽	冬(寒い季節)

(9) フアパン県サムタイ郡パオニュアン村（タイデン族）

除草は３回する。１回目は，畑に作小屋を建て焼き残りを焼いた後，播種儀礼をする前に行う。２回目は稲の背丈が20cmぐらいに成長したとき，３回目は稲の穂孕みの時期に行う。ニャーカップという草は，次のように言って人間を騙す。

Wai	Khun	Lamkhone	Pan	Dai	Khii	Maa
草を取る	乗せる	倒木	～のように	～できる	乗る	馬

Ao	khao	Kong Haa	Paan	Dai	Fing	huai	Nyam	Naon
入れる	入れる	燃え残り焼き			火に当たる	焚き火	時期	寒い

(10) フアパン県トン郡レン村（タイデン族）

除草作業は３回行う。第１回目と２回目の除草作業をワイ・ニャ・ハイと呼んで，１回目は稲の背丈が10cmぐらいに成長したとき，２回目は稲の背丈が50cmぐらいに成長したときに行う。第３回目の除草作業はルオン・ハイと呼び，稲の穂孕みの時期に行う。ニャーカッピーという草は，次のように言って人間を騙す。

Ao	Khun	goi	Kong	Paan	Dai	Khii	Maa
置く	乗せる	掛ける	倒木	～のように	～できる	乗る	馬

Ao	Khao	Sai	Kong Haa	Paan	Dai	Fing	Det	Nyam	Naon
置く	入れる	～に	燃え残り焼き			陽に当たる	太陽	時期	寒い

(11) フアパン県トン郡タムラーニュア村（タイプアン族）

除草作業はバイ・ハイと呼んで３回行う。第１回目は稲の背丈が10cmぐらいに成長したとき，ゴーン（除草用小手鍬）を用いて行う。第２回目は稲の背丈が20cm～30cmぐらいに成長したとき，ゴーン（除草用小手鍬）を用いて行う。第３回目の除草作業は稲の穂孕みの時期に，リャンム（稲刈り鎌）を使って，高く伸びた草の上の部分を切り取る。年中死なずになくならない草は，ニャーフルーンという草で，この草が生えると稲の背が低くなる。また，この草は次のように言って人間を騙し，脅迫する。

Thim	Sai	Hiin	Paan	Dai	Nan	Moon
置く	～に	石	～のように	～できる	座る	枕

Thim	Sai	Hoon	Paan	Dai	Non	Tuaa
		伐り株			寝る	敷布団

Thim	Sai	Nam	Tao	Tuaa	Lai	Muang	（旅行に行く）
		水	行く	全部	たくさんの	町	

Thim	Sai	Huai	Paan	Dai	Thaaut	Lai	Saa	（何回も生まれ変わる）
		火			生まれる		一生	

Fuat	Sai	Goon	Paan	Dai	Nan	Muang	（町の王になる）
叩き付ける		除草具			座る	町	

⑿　ウドムサイ県サイ郡ナモン村（タイルー族）

焼畑の草には，ニャーカッピー，ニャーキューなどがある。

焼畑で一番困る草はニャーカッピーという節で増えていく草で，「もし俺を抜いて伐り株に掛けると馬に乗っているようにいい気分である」と言って，人間を騙す。

⒀　ウドムサイ県ガ郡ティーンタイ村（タイルー族）

焼畑の除草は２～３回行う。ハイラオ（若い森の焼畑）は３回，10年間置いたところは２回行う。

焼畑で一番困る草はニャーカッピーという草で，二番目に困る草はニャメンという草である。ニャーカッピーは，「もし私を抜いて石の上に置いたら，太陽が当たったように温かい気分になる」と言い，また，「私を伐り株の上に置いたら，馬の背中に乗っているように涼しい気分だ」と言って人を騙す。

⒁　ポンサリー県クワ郡パクバーン村（ラオ族）

ニャーペッという草は焼畑で一番困る草である。この草は，「もし俺を抜いて伐り株に乗せてくれたら，俺は馬の背中に乗っているのと同じで気持ちがいいよ」と言い，「俺を抜いてハーハイ（燃え残りの木）に乗せてくれたら，俺は王様みたいな玉座に座っているような気分だよ」と言って，本当は死ぬくせに何をされても死なないよといい，人間を馬鹿にする。

⒂　ポンサリー県クワ郡カナ村（ラオ族）

焼畑の除草は６月に入って１回，その後２回，合計３回行う。

焼畑で一番困る草はマッパオという稲の成長を邪魔する蔓性の草で，握り拳大の実が成り，その実を切るとそこから新しい芽が出る。人間が抜いて伐り株の上に乗せると，「馬の背に乗っているようで気分がいい」と言い，コーンハイ（火）に投げ込むと「太陽に当たっているようで気分がいい」と言った。そこで，人間が川に流すと「ああ死ぬ」と叫んだ。

⒃　ポンサリー県マイ郡ナーカム村（タイダム族）

畑（焼畑）の除草は３回行う。１回目は稲の背丈が30cmくらいに伸びたとき，ウエック（除草用小鍬）を用いて草の根を掘ったり，削り取ったりして除草を行う。２回目は穂が孕んだころに，１回目と同じくウエック（除草用小鍬）を用いて除草を行う。３回目は，穂が出てきたとき，パー（山刀）を用いて，伐り株から伸びてきた萌芽の枝葉や，播き上がってきた蔓などを取り除く。

畑で一番困る草は，ニャーカイカとニャーカッピーという草である。ニャーカイカは毛の生えた草で，その毛が皮膚に触れたら痒くなる草である。また，ニャーカッピーは，畑に蔓延ると稲が生長しなくなり枯れてしまう草である。この草は，次のように言って人間を騙す。

goi	Katoo	khuu	Dai	Khii	Maa
載せる	伐り株	～と一緒に	～できる	乗る	馬

Thim	Sai	Kong Haa	khuu	Dai	Fing	Det	douang sanm
置く	～に	燃え残り焼き			陽に当たる	太陽	３月

Thim	Sai	nam	khuu	Dai	Khii	fua
		水				舟

(17) ポンサリー県マイ郡ソプナオ村（ラオ族）

畑（焼畑）の除草作業はセーニャーといって３回行う。１回目は稲の背丈が10cm～15cmくらいに伸びたとき，ウエック（除草用小鍬）を用いて草の根を掘ったり，削り取ったりして除草を行う。２回目は稲の背丈が膝の高さの伸びたころに，１回目と同じくウエック（除草用小鍬）を用いて除草を行う。３回目は，穂孕みしたとき，キヨ（稲刈り鎌）を用いて，伐り株から伸びてきた萌芽の枝葉や，巻き上がってきた蔓などを取り除く。

畑で一番困る草は，ニャーカッピーやニャーハンフー，ニャーハンフンという草である。ニャーハンフーは毛の生えた草で，その毛が皮膚に触れたら痒くなる草である。また，ニャーカッピーは，「伐り株に載せると馬の背に中に乗っている気分だ」と言って人間を騙す。

(18) ルアンパバーン県ゴイ郡ドーン村（カム族）

焼畑の除草は６月に入って１回，その後２回，合計３回行う。焼畑で一番困る草はトゥゴーンという草で，稲が死んでしまうこともある。

この草は，人間に嘘をつき，脅す。人間が抜き取って伐り株に置こうとすると「私をここに置くともっと増えますよ」と言い，私を土の上に置けば「死にますよ」と言う。

(19) ルアンパバーン県ゴイ郡ハッサプーイ村（カム族）

焼畑で一番困る草はチットサンカラヨンという草で，二番目に困る草はチットハッウーという草である。チットサンカラヨンは，もし俺を抜いて伐り株の上に置いたら死なないよ，穴を掘って埋めたら死ぬよと言って人を騙し，脅す。

(20) ルアンパバーン県ゴイ郡ハッカーム村（カム族）

除草作業は，７月と稲が穂孕みする９月ころの２回行う。

草の中でもキッシンカラヨーという草は，何回取っても出てくる草で，「僕を木株（伐り株）の上に置いたら，花が咲いて実がなるよ。僕を土の上に置けば死ぬよ」と言って，人間を愚弄し騙し，脅す。

(21) フアパン県サムタイ郡プンシアン村（カム族）

草取りは２回行う。第１回目は，草が多い場合は稲の背丈が20cmぐらいの高さに成長したとき，草が少ない場合は，稲の背丈が40cmぐらいの高さに成長したとき行い，第２回目は，第１回目に20cmぐらいで取った所は稲の背丈が膝の高さに成長したとき，40cmの高さで取った所は稲が穂孕みする時期に除草する。

一番大変な草は，タゴーン（ラオ語名称ニャーカップ）という草と，キッウエイ（ラオ語名称ニャーキュー）という草である。キッウエイは背が高くなる草である。

タゴーンは，節から根が出て延びて地面いっぱいに広がっていく。一生懸命取り除かないと，稲が枯れて死んでしまう。この草は，次のように言って人間を騙す。

pura	bong	lukku	men	haan
置く	場所	平地	～は	死ぬ

labakku	tatroong	men	lut
掛け置く	倒木		気分がよい

(22) フアパン県トン郡プエンドン村（カム族）

草取りは３回行う。第１回目は稲の背丈が20cmぐらいの高さに成長したとき，第２回目は，20cmぐらいで取った所は稲の背丈が30cmぐらいの高さに成長したとき，第３回目は稲が穂孕みする時期に除草する。

一番大変な草は，チッカラヨン（ラオ語名称ニャーカップ）という草である。この草が（畑に蔓延（はびこ）ると）本当に稲を駄目にし，稲が生長しなかったり，死んだりする。この草は，次のように言って人間を騙し，脅す。

Unpura	Da	Tatroong	Lang	Yoon	I	Lut
置く	場所	倒木	～になる	きれい	私たち	全部

Pura	I	Da	Lukku	Mut	I	Haan	Mut
置く			死ぬ	全部		死ぬ	

(23) フアパン県カム郡サントン村（カム族）

草取りは早稲は２回行う。第１回目は，６月上旬頃，稲の背丈が15cmから20cmぐらいの高さに成長したとき，第２回目は，稲の穂が出ようとするころ，背丈は人間の腰の高さぐらいに成長した時期に除草する。

中稲，晩稲は３回行う。第１回目は，６月上旬頃，稲の背丈が15cmから20cmぐらいの高さに成長したとき，大きなウエック（除草用小手鍬）で土まで起こして草を根から引き抜く。第２回目は，９月下旬頃，稲の背丈が人間の胸の高さぐらいに成長した時期に，小さなウエックで草を削り取るようにして除草する。第３回目は，10月下旬から11月上旬頃，稲の穂が出たとき手で抜き取る。

チッタゴーン（ラオ語名称ニャーカッピー）という草は，畑いっぱいに生えるので稲によくない。この草は，次のように言って人間を騙し，脅す。

Pura	Kandoor	Tankuruu	Dechya	Pulee
置く	頭	伐り株	～になる	実

Pura	Tiiloon	Hannree	Dechya	Laang
置く	倒木	置く		花

Waan	Da	Pitii	Dechya	Haan	huu
置く	場所	土		死ぬ	腐る

(24) ウドムサイ県サイ郡サナンピー村（カム族）

焼畑の除草は２～３回行う。一番困る草はパラーセックという草で，二番目に困る草はチンカイヨルという草で，薄赤い花を咲かせ，節で増えていく花である。

チンカイヨルは，「もし私を抜いて伐り株の上に置いたら花を咲かせて実になって増えます」と言い，「私を下（地面）に置いたら死にます」と言って人を騙し，脅す。

(25) ウドムサイ県サイ郡パクメン村（カム族）

焼畑の雑草で一番困る草は，グントルー（ラオ語名称ニャーカッピー）という，蔓で伸びて紫の花が咲く花である。この花は人間に向かって次のように言って人間を騙し，脅す。

ウンダッ	クローン	ルアン	ヨーン	イ	ジュール
置く	倒木	～になる	きれい	私たち	垂れ下がる

ウンダッ	ルッ	ルック	ムック	イ	ハーン
置く	窪み	死ぬ	全部		死ぬ

(26) ウドムサイ県ガ郡ホワイレンム村（カム族）

焼畑の除草は，芽が10cmぐらいに伸びたころに１回目，40cmくらいに伸びたころ２回目，稲が妊娠するころに３回目を行う。

焼畑で一番困る草はタゴンという草で，二番目に困る草はプレッという草である。タゴンは，「もし私を抜いて伐り株の上に置いたら，地面に落ちてまた増えますよ」，「私を下（地面）に置いたら死んでしまいますよ」と言って人を騙し，脅す。

(27) ウドムサイ県ガ郡ノンタオ村（カム族）

焼畑の除草は２回行う。

タゴン（ラオ語名称ニャーカッピー）は，最初木の上に生えていたがなかなか土まで下りてこれなかった。そこで，人間に向かって“木の上においたら増やしますよ。土の上においたら死にますよ。”と嘘をつき，脅した。人間がそれを信じてそのとおりにしたら，死なずにいっぱい増えた。だから，根まで抜き取って丸めて伐り株の上に置いたりする。

(28) ウドムサイ県ガ郡ケオ村（カム族）

焼畑の除草は，１回目に稲の背丈が20cmぐらいに伸びたころ，２回目に40cmくらい伸びたころ，３回目にそろそろ穂が出るというころに行う。グッ・トン（伐る・竹の新芽）も行う。

一番困る草は，タゴンという節で芽を出して伸びていく草で，ラオ語ではニャーカッピーと呼ぶ。この草は人間を騙し，脅す。「もし俺を石の上に置いたら花を咲かせるよ。もし伐り株の上に乗せたら実になるよ」と言う。

(29) ウドムサイ県フン郡プーラット村（カム族）

焼畑の除草は，草が稲に障るようになったころに１回目，それ以後に２回に合計３回行う。

コロンプアー（タゴンとも呼ぶ）は，「もし俺を土の上に置けばもっと増やします」と言い，「もし俺を伐り株の上に置けば花を咲かせて実になって下に落ちて散って，もっと増やします」と言い，「もし俺を谷や川沿いの所に置けば死にます」と言って，人間を脅迫し，騙す。

(30) ポンサリー県マイ郡モッチャラー村（カム族）

畑（焼畑）の除草は３回行う。１回目は稲の芽が出て背丈が20cmくらいに伸びたとき，ウァール（除草用小鍬）を用いて草の根を掘ったり，削り取ったりして除草を行う。２回目は稲の背丈が膝の高さくらいに伸びたころに，１回目と同じくウァールを用いて除草を行う。３回目は，稲がそろそろ実るというころに，キヨ（鎌）を用いて，伐り株から伸びてきた萌

芽の枝葉や，巻き上がってきた蔓などを取り除く。

焼畑で一番困る草は，ビンヴァツ(ラオ語名ニャーカイ)という表面に毛の生えた草で，その毛が皮膚に触れたら痒くなる草である。チュンクロヨン(ニャーカッピー)が，人間を騙すということはきかないが，プレポ(ラオ語名マッパオ)という蔓性の草は，除草しないと段々株になって稲の成長を邪魔する。この草は，人間に向かって次のように言って騙し，脅す。

人間が僕を抜いてダユンハレッ（畑の足：下側の縁）に捨てたら，さらに下側に向かって生えていくよ。だから，カルッハレッ（畑の頭：上側の縁）に置くと，成長して畑いっぱいに広がるよ。

(31) ポンサリー県マイ郡オムカネン村（カムクエン族）

畑（焼畑）の除草は３回行う。１回目は稲の芽が出て背丈が２㎝～５㎝くらいに伸びたとき，ウァール（除草用小鍬）を用いて草の根を掘ったり，削り取ったりして除草を行う。２回目は稲の背丈が膝の高さくらいに伸びたころに，１回目と同じくウァールを用いて除草を行う。３回目は，稲が穂孕みしたころにウァールで除草する。

焼畑で一番困る草は，キッツンコヨロー（ラオ語名称ニャーカッピー）で，この草が蔓延ると稲が枯れて死ぬ。この草は，人間に向かって次のように言って騙す。

プラッ	トローン	ドゥンヨン	チー	プレッ
捨て置く	倒れた木	下向きに下がる	～になる	実

プラッ	グルンルック	タ	チー	カイ
	畑の頭(上側の縁)	逆向きに		元に戻る

プラッ	ドゥユアン	ルンウアン	レー	チー	クワン
	畑の足(下側の縁)	上の方に上っていく	私		上に上る

プラッ	ダフンルック	レー	チー	ハーン
	窪み			死ぬ

(32) ポンサリー県マイ郡ピアレッ村（カム族）

畑（焼畑）の除草は３回行う。１回目は稲の芽が出て背丈が５㎝くらいに伸びたとき，ウァール（除草用小鍬）を用いて草の根を掘ったり，削り取ったりして除草を行う。２回目は稲の背丈が膝の高さくらいに伸びたころに，１回目と同じくウァールを用いて除草を行う。３回目は，稲が穂孕みしたころにウァールで除草する。

焼畑で一番困る草は，キッツンコヨロー（ラオ語名称ニャーカッピー）で，この草が蔓延ると稲が枯れて死ぬ。この草は，人間に向かって次のように言って騙し，脅す。

プラッ	デンルック	ルックモック	オッ	ハーン
置く	地面の低いところ(窪み)	(不詳)	私	死ぬ

プラッ	デッ	トローン	ルンギョン	オッ	プレッ
	上	倒れた木	下向きに		実になる

プラッ	ド	トルンクーン	トルモン	オッ	プレッ
	上	伐り株	良く実になる		

(33) ルアンナムター県ナーレー郡トントーン村（カム族）

除草作業は３回程度行う。１回目は稲が15cm伸びたころ，２回目は稲が人の膝くらいに伸びたころ，３回目は穂が孕んだころに行う。

焼畑で一番困る草は，ニャートゴン（ラオ語名称ニャーカッピー）である。

この草は，人間に向かって次のように言って騙し，脅す。

エテ	トンクン	プレッ	ルンヨーン
置く	伐り株	実がなる	きれいに

エテ	トローン	チャッワーン	ル	ヤーイ
	焼き残りの倒木	長く伸びる	土	～まで

エテ	パテッ	チャハーン	カラウエッ	カラウエッ
	地面	死にます	萎れて	

(34) ルアンナムター県プーカー郡プーレット村（カムユアン族）

畑（焼畑）の草取りはヘーン・ハレッ（草を取る・畑）と呼んで３回行う。１回目は稲の背丈が５cmぐらいの高さに成長したとき，２回目は，膝の高さくらいに伸びたとき，３回目は穂孕みしたころにいずれもウワール（除草用小鍬）で行う。

焼畑の草で困る草は，チッタゴーン（ラオ語名称ニャーカッピー），パラヤーック，スンチョーンという草である。特に，チッタゴーンは，抜くと人間に向かって次のように言って騙し，脅す。

ナ	タローン	ア	プレッ
置く	倒木	～になる	実

ナ	パテッ	チャ	ハーン
	地面	～になる	死ぬ

(35) ルアンナムター県プーカー郡ナムシン村（カムクエン族）

畑（焼畑）の草取りはヘアル・ユッ（取る・草）と呼んで３回行う。１回目は稲の背丈が20cm～30cmぐらいの高さに成長したとき，２回目は，太股の高さくらいに伸びたとき，３回目は穂孕みしたころにいずれもウワール（除草用小鍬）で行う。

焼畑の草で困る草は，ユップラヤーッ，ユッレムセーッ，ユッウェール，ユッタゴーン（ラオ語名称ニャーカッピー）である。特に，ユッタゴーンは，抜くと人間に向かって次のように言って騙し，脅す。

ウン	クーイ	タローン	ノン	プレッ
置く	上	倒木	再び	実になる

ウン	ター	ガーテッ	オ	テェー	ハーン
	～に	地面	私	～になる	死ぬ

(36) ボケオ県ター郡ドンミサイ村（カム族）

畑（焼畑）の草取りはヘール・ハレッ（草を取る・畑）と呼んで３回行う。１回目は稲の背丈が手首から指先ぐらいの高さに成長したとき，２回目は，膝の高さくらいに伸びたとき，

いずれもヴァール（除草用小鍬）で行う。3回目は穂孕みするころに，カラニョ（鎌）を用いて，背丈の高い草を刈り取って除く。

焼畑の草で一番困る草は，チッタゴーン（ラオ語名称ニャーカッピー）という草である。この草は，草取りしてもなかなか死なない。抜き取ったら稲株に隙間に集めておくが，上の方は死んでも地面についているものは死なない。抜くと人間に向かって次のように言う。

ティッ	タンルック	ラムック	チャ	ハーン
置く	窪み	全部	～になる	死ぬ

ティッ	タックロー	グレン	プレッ	オ	ラーン
	倒木	たくさんになる	実になる	私	花が咲く

(37) ルアンナムター県プーカー郡タールワン村（モン族）

焼畑の除草作業はロンド・テーと呼び2回程度行う。1回目は稲の背丈が20cm～30cm伸びたころ，2回目は穂が孕む直前ころに行う。

焼畑で困る草はプーチーという草とヨートゥー（ラオ語名称のニャーカッピー）である。プーチーは，最初は地面を這って伸びるが，やがて立ち上がってくる草で，多すぎて刈り取るのが間に合わないと稲の成長に悪い。また，ヨートゥーがたくさん蔓延る理由について次のようにも語る。

昔，ヨートゥーは人間が抜いて伐り株の上に乗せたら困ってしまった。そこで，ヨートゥーは，野鳥に向かって「私の実のところには虫がたくさん隠れているよ。私の実のところを探せば，虫が捕れるよ」と言って野鳥を騙した。野鳥はそれを信じて，ヨートゥーの実の成っているところを突いて虫を探した。

それで，ヨートゥーの実が土の上にたくさん落ちて，ヨートゥーはたくさん生き延びることができたのである。

(38) フアパン県トン郡ホワイトン村（ヤオ族）

畑（焼畑）の草取りは3回行う。1回目は稲の背丈が15cm～20cmぐらいの高さに成長したとき，除草具で草を切り取り，稲株に土を寄せる。2回目は，稲の出穂時期に行い，草の根まで引き抜く。3回目は稲の収穫の寸前にキヨ（稲刈り鎌）で刈り取る。畑の草と稲の関係については，次のような伝承が語られている。

昔々，草は天にあり，地上に草は何もなかった。稲が，地面には草が何もないので熱くて熱くて堪らなくなり，草よ天から降りてきて太陽の日射しを防いでくださいとお願いをしたので，畑に草が出てくるようになった。

また，この草は人間が引き抜くと次のように嘯く。

草を抜いて，カトー（伐り株）の上に置いても死なないので，人間が草に向かって「なぜお前は死なないのか」と聞いたら，「椅子の上に座っているからだよ」と答えた。そこで，今度は別のところに置いてみようと思って倒木の上に置いても，やはり死なないので「なぜお前は死なないのか」と聞いたら，「俺は馬の上に乗っているからだ」と答えた。

(39) ルアンナムター県プーカー郡トンラーット村（アカ族）

畑の草取りは３回行う。１回目は稲の背丈が30㎝ぐらいの高さに成長したとき，ナグ（除草用小鍬）で草をを行う。２回目は稲の背丈が膝ぐらいの高さに成長したとき，ナグで除草を行う。３回目は，稲の穂孕みの直前にナグで行う。

畑で一番困る草は，トークラソ（ラオ語名称ニャーカッピー）という草である。この草は，地面に広がる草で，なかなか死なない草である。この草は，人間に向かって次のように嘯く。

ティ	ヌ	イ	ロタ	ズン	ポン	セ	ネ	マ	シ
1	日	行く	沸騰させたお湯	3	回	掛ける	～に	～ない	死ぬ

マ	シ	ズン	ゴ	ダペエ	ティ	ジュン
			回	草の名		二つ１組

ティ	ヌ	ハーツ	ミ	ブ	ダイ	エ	ジョ	ネ	マ	シ
		木の名称	薪	乾燥した	9	回	燃やす			

2　物言わないツユクサＡ／枯れずに蔓延る雑草の事例

(1)　ルアンパバーン県ゴイ郡テンケーン村（ラオ族）

除草のことはシャニャーという。森が若いから草が多いので４～５回行う。大きな森だったら２回で済む。焼畑の草には，ニャーカッピー，ニャーカッ，ニャーキューなどがある。

(2)　フアパン県サムタイ郡パットタイ村（タイデン族）

除草作業は３回程度行う。１回目は稲が15㎝～20㎝伸びたころ，2回目は稲が人の腰くらいに伸びたころ，３回目は穂が孕むころに行う。

一番困る草は，ニャーキューとニャーカップである。ニャーカップは，取っても取っても生えてくる草である。取って土の中に埋めたり，火の中に入れて燃やしたりする。人間を騙したりするようなことはない。

(3)　ウドムサイ県ムンガ郡テンケーン村（ラオ族）

一番困る草はニャーカッピーという節で増えていく草で，抜いたら袋に入れて腐るのを待って捨てる。二番目に困る草はニャーカッ，三番目はニャーキューという草である。人を騙す話はない。

(4)　ウドムサイ県サイ郡ナムレーン村（カム族）

焼畑の除草は，芽が10㎝～15㎝に伸びたころ最初の草取りを行う。それが終わって伸びていたら２回目を行う。一番困る草はサンカラヨルンという節で増えていく草で，二番目に困る草はサオンウー，三番目はクルンソッという草である。人を騙す話はない。

(5)　ルアンナムター県ナーレー郡サムソン村（カム族）

除草作業は３回程度行う。１回目は稲が３㎝～５㎝伸びたころ，2回目は稲が人の膝くらいに伸びたころ，３回目は穂が孕んだころに行う。

一番困る草はタコンローン（ラオ語名のニャーカッピー）であるが，人を騙すという話はない。

(6) ルアンナムター県ナーレー郡サムソン村（カム族）

除草作業は３回程度行う。１回目は稲が３㎝～５㎝伸びたころ，２回目は稲が人の膝くらいに伸びたころ，３回目は穂が孕んだころに行う。

一番困る草はタコンローン（ラオ語名のニャーカッピー）であるが，人を騙すという話はない。

(7) ルアンナムター県ナーレー郡サリアーンパン村（ラメット族）

人を騙す雑草はない。除草作業は３回程度行う。１回目は稲が５㎝～６㎝伸びたころ，２回目は稲が人の膝くらいに伸びたころ，３回目は穂が孕んで丸くなったころに行う。

(8) ルアンナムター県シン郡ヤールー村（アカ族）

人間を愚弄する雑草の話はない。畑がヤサ（若い森：伐採後８年までの森）の場合は２回から３回除草を行う。１回目は稲が20㎝位の高さに伸びたころ，２回目は１ヶ月後くらい，三回目は稲穂がふくらみ始めるころに行う。

サカ（年取った森：伐採後９年目以上の森）の場合は１回から２回，大きな森の場合は１回だけ除草を行う。

(9) ポンサリー県マイ郡キューカチャンム村（ロマ族）

畑（焼畑）の除草は３回行う。１回目は稲の芽が出て背丈が15㎝～20㎝くらいに伸びたとき，チェコー（除草用小鍬）を用いて草の根を掘ったり，削り取ったりして除草を行う。２回目は稲の背丈が70㎝～80㎝くらいに伸びたころに，１回目と同じくチェコーを用いて除草を行う。３回目は，稲がそろそろ実るというころに，エコ（鎌）を用いて，伐り株から伸びてきた萌芽の枝葉や，巻き上がってきた蔓などを取り除く。

焼畑で困る草は，ツゥーキャッ，シェフゥッ，イシュロイという草である。アーチャピシャ（ラオ語名ニャーカッピー）はあるが，人間を騙すという話はきかない。

(10) ルアンナムター県プーカー郡ナムパーマン村（ムスー族）

畑（焼畑）の除草作業はハーモアといい３回行う。１回目は稲の芽が出て背丈が20㎝くらいに伸びたとき，メチュッ（除草用小鍬）を用いて草の根を掘ったり，削り取ったりして除草を行う。２回目は稲の背丈が50㎝～60㎝くらいに伸びたころに，１回目と同じくメチュッを用いて除草を行う。３回目は，稲が穂孕みするというころに，トー（山刀）を用いて伐り株から伸びてきた萌芽の枝葉や，巻き上がってきた蔓などを取り除く。

焼畑で困る草は，セプチューという背丈が高く伸びる草と，ワッフーッ（ラオ語名称ニャーカッピー）という草である。ワッフーッが，人間を騙すという話はきかない

3 物言わないツユクサＢ／射日神話と枯れずに蔓延る雑草の事例

(1) ルアンナムター県プーカー郡タールワン村（モン族）

焼畑の除草作業はロンド・テーと呼び２回程度行う。１回目は稲の背丈が20㎝～30㎝伸びたころ，２回目は穂が孕む直前ころに行う。

焼畑で困る草はプーチーという草とヨートゥー（ラオ語名称のニャーカッピー）である。

プーチーは，最初は地面を這って伸びるが，やがて立ち上がってくる草で，多すぎて切るのが間に合わないと稲の成長に悪い。

ヨートゥーは，いつどこに置いても死なない草で，畑に蔓延ると稲の成長に悪い草である。この草が死なない理由を次のように語っている。

昔は，太陽が何個もあった。それが次々順番に朝日，夕日となって出てきて暑かった。そこで人間は怒って太陽を弓で射殺してしまった。ところが，そのとき１個の太陽だけが地球に遊びに来ていて，ヨートゥーのところで遊んでいた。しかし，人間はそのことを知らなかったので生き残ることができた。しかし，その太陽は人間が怖くなって隠れてしまった。だから，太陽が出なくなったので，地球は暗闇になってしまった。そのため人間は困ってしまった。

人間は，太陽が出て欲しいので，鶏の頭に櫛を付けて，太陽が出る時間を見計らって鳴かせた。それを聞いた太陽は姿を現した。そのときからこの世には１個の太陽が出るようになった。また，鶏は太陽の出る時間が分かるようになった。

だから，ヨートゥーはそのとき太陽に遊んでもらっていたので，暑さに慣れてしまっていくら暑くても死ななくなった。鶏の頭の烏帽子が櫛の形をしているのもそのためである。

(2) ボケオ県ムン郡ナムガム村（ヤオ族）

畑（焼畑）の草取り作業は，ニャッ・ミャー（取る・草）と呼び，３回行う。１回目は稲の背丈が30㎝～40㎝ぐらいの高さに成長したとき，クエッ（除草用小鍬具）で行う。２回目は，稲の背丈が膝上，太股の高さぐらいに伸びたころにクエッで行う。３回目は，稲が穂孕みを始めるころに，ヅッ（山刀）を用いて，稲に巻上がっている蔓性の草を刈り取る。

畑の草の中でやっかいな草は，ソッパーン（ラオ語名称ニャーカッピー）という草である。この草は，抜いて伐り株の上に乗せておいても死なないし，取っても取っても残った節から根が延び広がる。

この草が死なない理由について次のような伝承がある。

昔，太陽は12個あった。そのためとても暑かったので，人間はパチンコで撃ち落とした。撃ち落とされたうちの１個の太陽が，この草に隠れてしまった。この草は，その太陽を人間から守ってやった。そのため，人間は見つけ出すことができなくなり，その太陽は天に帰ることができた。

この草は，このとき太陽の暑さに慣れてしまったので，伐り株の上に乗せておいても死なない。

Ⅳ　両地域の事例の検討

以上の事例を，日本，ラオス北部両地域のツユクサの廃棄場所と語りの態度と，その共通性と異質性を比較してみたのが，表Ⅰ，表Ⅱの「物言う雑草分類一覧」である。以下，これに基づいて検討を加えてみたい。

1　伝承要素の類型

(1)　廃棄の場所

先ず，表Ⅰ及び表Ⅱを見ると抜いた雑草の廃棄場所（要素）に特徴がみられることが分かる。それは，「石の上」，「木の上」，「川（流す）」，「焼く」，「土中」，「畑の頭，足」に分けられる。

このことについて日本列島の中について，さらに，ラオス北部の中での違いについて検討し，両地域を比較してみたい。

①　日本の事例（表Ⅰ）

ア，「石の上」……Ⅱ－１－(1)【鹿児島：佐多・打詰】，Ⅱ－１－(4)【熊本：五木・下梶原２】，Ⅱ－１－(6)【宮崎：西都／東米良・八重】，Ⅱ－１－(8)【宮崎：西米良・板谷－１】，Ⅱ－１－(9)【宮崎：西米良・板谷－２】

イ，「木の上（枝）」……Ⅱ－１－(4)【熊本：五木・下梶原－２】，Ⅱ－１－(6)【宮崎：西都／東米良・八重】，Ⅱ－１－(8)【宮崎：西米良・板谷－１】，Ⅱ－１－(9)【宮崎：西米良・板谷－２】，Ⅱ－１－(10)【宮崎：西米良・小川】，Ⅱ－１－(11)【宮崎：西米良・越野尾－１】，Ⅱ－１－(12)【宮崎：西米良・越野尾－２】，Ⅱ－１－(14)【愛媛：東温】

ウ，「川（流す）」……Ⅱ－１－(2)【熊本：五木・出羽】，Ⅱ－１－(4)【熊本：五木下梶原－２】，Ⅱ－１－(5)【熊本：五木・栗鶴】，Ⅱ－１－(7)【宮崎：西都・上揚】，Ⅱ－１－(9)【宮崎：西米良・板谷－２】，Ⅱ－１－(11)【宮崎：西米良・越野尾－１】，Ⅱ－１－(12)【宮：西米良・越野尾―２】

エ，「火中（焼く）・日照り」……Ⅱ－１－(2)【熊本：五木・出羽】，Ⅱ－１－(3)【熊本：五木・下梶原－１】，Ⅱ－１－(4)【熊本：五木・下梶原－２】，Ⅱ－１－(7)【宮崎：西都／東米良・上揚】，Ⅱ－１－(10)【宮崎：西米良・小川】，Ⅱ－１－(12)【宮崎：西米良・越野尾―２】，Ⅱ－１－(13)【高知：椿山】

オ，「土中（埋める）」……Ⅱ－１－(2)【熊本：五木・出羽】，Ⅱ－１－(3)【熊本：五木・下梶原－１】，Ⅱ－１－(4)【熊本：五木下梶原－２】，Ⅱ－１－(13)【高知：椿山】

以上のことから，日本列島（南九州・九州山地及び四国山地）の事例では，「石の上」，「木の上」，「川（流す）」，「焼く」，「土中」の５つに類型化することができ，南九州では５つの類型全てが伝承されていることが分かる。それに比べて，四国山地では明確に認められるのは「木の枝」と「土中」の２類型で，「日照り」も「焼く」の範疇に入れて考えたとしても３類型に留まる。事例は少ないが，この差異が意味することが何なのか興味深い。さらに，事例の収集に努めなければならない。

②　ラオス北部の事例（表Ⅱ）

一方，ラオス北部においても抜いた雑草の廃棄場所として「石の上」，「木の上」，「川（流す）」，「焼く」，「土中」の５つに類型することができ，伝承される廃棄する場所（要素）が日本（南九州及び四国山脈）の５類型と見事に一致することが分かる。

ア，「石の上」……Ⅲ－１－(1)，(11)，(13)【タイ族系】，Ⅲ－１－(28)【カム族】

イ，「木の上（伐り株，倒木）」……Ⅲ－１－(1)～(7)，(9)～(17)【タイ族系】，Ⅲ－１－(18)～(29)，(31－Ａ)，(32－Ａ，Ｂ）～(36)【カム族系】，Ⅲ－１－(37)【モン族】，Ⅲ－１－（38－Ａ，Ｂ）【ヤオ族系】

ウ，「川（流す）」…Ⅲ－１－(1)，（４－Ａ)，(11)，(15)～(16)【タイ族系】，Ⅲ－１－(29)【カム族系】，Ⅲ－１－(39)【アカ族系】

エ，「火中（焼く）」……Ⅲ－１－(2)，（４－Ａ，Ｂ）～(11)，(14)～(16)【タイ族系】，Ⅲ－１－(39)【アカ族系】

オ，「土中（埋める）」……Ⅲ－１－(1)，(11)【タイ族系】，Ⅲ－１－(18)～（23－Ａ)，(24)～(27)，(29)，(31－Ａ)，(32－Ａ)，(33－Ａ)～(34)，(36)【カム族系】，Ⅲ－１－(37)【モン族】

カ，「畑の頭と足」……Ⅲ－１－（31－Ａ，Ｂ）～（31－Ａ，Ｂ)【カム族】

この結果を見ると，ツユクサの廃棄場所は民族の違いによってその差異が明確に認められることがわかる。しかも，地理的，空間的には離れていても民族が同じであれば，その傾向はほとんど変わらないのが特徴である。

たとえば，「石の上」は低地ラオに属するタイ族系のラオ，タイルー，タイダム，タイデン，タイプアン族に見られ，タイ族系以外には例外的にⅢ－１－(28)のカム族に１例だけ認められるのみである。

これと同様に，「川（流す)」型もⅢ－１－(29)のカム族の例を除けば，これもまたタイ族系にのみに伝承されている。

さらに，「火中（焼く)」の型もⅢ－１－(39)のアカ族の１例を除けばタイ族系のみにしか認められない。特に，カム族系には全く認められないのが特徴である。従って，この「石の上」型や「川（流す)」型，「火中（焼く)」の型はタイ族系に特有のものと考えて差し支えないであろう。

これに対し，「土中」型は圧倒的にカム族，カムユアン族などカム族系の民族の間に伝承されており，タイ族系ではⅢ－１－(1)のタイルー族と，除草具で地面に叩き付けるということで「土中」の範疇に入れたⅢ－１－(11)のタイプアンの２例に過ぎない。それ以外には，野鳥が地面に実を落とすということで土中の範疇に入れた従ってⅢ－１－(37)のモン族１例のみである。従って，この「土中（埋める)」型はカム族系に特有の伝承と考えて差し支えない。

それに比べて，「木の上」型は例外的にタイ族系では，Ⅲ－１－（８－Ａ，Ｂ)，Ⅲ－１－（８－Ａ，Ｂ)が１例のみであり，カム族系ではⅢ－１－（30－Ａ，Ｂ)，(31－Ｂ)の２例のみで，Ⅲ－１－(39)のアカ族の１例を加えても，39例中４例に過ぎない。つまり，タイ族系，カム族系，モン族，ヤオ族など民族の違いを越えて伝承されていることが分かる。

さて，こうした廃棄される場所（要素）は，その全てが「焼畑耕作」に深く関わる要素であることは明らかである。たとえば，「木の上」型は，「木の枝，切り株，倒木」が，胸の高さくらいで伐り焼畑の伐採技術に関わるものであろう。森そのもの，あるいは伐採した伐り株に関わるものである。さらに，「物言う雑草」／ツユクサを除草したときは，この

草だけは切株の上に乗せたり，焼畑の外に持ち出し地面から高い（遠い）ところに置いておくという伝承と重なる。

さらに，「火中（焼く）」は，「焼畑」を象徴する「火」で「焼く」行為そのものを背景としていることは疑いを挟む余地はない。特に，燃え残りを集積して再度焼く火の中で焼くという伝承は，それが最初の除草作業と重なることにも関係しているからであろう。

また，「石」が語ら背景には，石の存在そのものが焼畑地の特徴であり，土だけの土地よりも石の混じった土地が適しているという伝承もあり，そうしたことを反映していると思われる。

同じく，「川（流す）」は，「物言う雑草」／ツユクサを除草したときは，この草だけは焼畑の外に持ち出し川に流すという伝承と重なる。

さらに，「土中（埋める）」も，播種作業や除草作業そのものの行為を反映していると言える。

さて，あらためて日本列島の５類型とラオスの６類型の在り方を比較すると，両地域の焼畑に関わる「物言う雑草」の「廃棄場所」は，見事な一致を示すことに驚きを禁じ得ない。これは，単なる空間的，地理的に離れた場所で同時多発的，偶発的に発生したと理解するには，あまりに一致しすぎるのである。

しかし，そうした一致の有り様をさらに注意深く見ていくと，日本列島の分布が地理的な差異と見えるのに対し，ラオスの場合は民族間の差異として理解できることが明確になる。「木の上」型も民族間で廃棄場所が一致するからといって，内容の総てが一致することを意味しない。これは一体何を物語っているのか。それを確かなものにするために，次に，「物言う雑草／ツユクサ」の人間に対する物言いの態度を類型化してみたい。

2　物言いの態度の分類

それでは，ツユクサは，人間に対してどのような態度で「物言い」をしているのであろうか。逆な言い方をすれば，人間はどのようにツユクサの「物言い」を受け止めているのであろうかということである。それは，日本（南九州・九州山地及び四国山地）の事例では，どのような差異があるのであろうか。また，ラオス北部の事例において，民族間における差異，地理的，空間的な差異があるのかをみてみたい。

(1)　日本の事例

先ず，日本（南九州・九州山地及び四国山地）の事例からみてみよう。表１の「物言いの態度」の欄をみると，人間がツユクサを絶滅させようとしても絶対に生き延びてやると，人間に向かって強烈な物言いをする脅迫型と，人間に対してやせ我慢をしているような嘯きの物言いをしながら，人間を騙して生き延びようとする嘯き型の２つに類型化することができる。しかも，両者ともに廃棄する場所を何かに喩えることをしない非例示型であり，喩えの表現を採る嘯き例示型は認められない。それに従って事例のそれぞれを分類してみると，おおよそ次のようになる。

ア，脅迫例示型……無し

イ，脅迫非例示型……Ⅱ－１－(1)【鹿児島Ⅱ－１－：佐多・打詰】，Ⅱ－１－(2)【熊本：五木・出羽】，Ⅱ－１－(3)【熊本：五木・下梶原－１】，Ⅱ－１－(4)【熊本：五木・下梶原－２】，Ⅱ－１－(5)【熊本：五木・栗鶴】，Ⅱ－１－(7)【宮崎：西都・上揚】，Ⅱ－１－(8)【宮崎：西米良・板谷－１】，Ⅱ－１－(9)【宮崎：西米良・板谷－２】，Ⅱ－１－(10)【宮崎：西米良・小川】，Ⅱ－１－(11)【宮崎：西米良・越野尾－１】，Ⅱ－１－(12)【宮崎：西米良・越野尾－２】

ウ，嘯き例示型……無し

エ，嘯き非例示型……Ⅱ－１－(6)【宮崎：西都・八重／東米良】，Ⅱ－１－(11)【宮崎：西米良・越野尾－Ｂ】，Ⅱ－１－(13)【高知：池川・椿山】，Ⅱ－１－(14)【愛媛：東温】

(2) ラオス北部の事例

一方，表Ⅱはラオス北部における物言いの態度を分類したものである。それを見るとラオス北部の事例も脅迫型と嘯き型の２つ類型することができ，さらに，それぞれ例示型と非例示型の２つの型に分類することができる。

ア，脅迫例示型……Ⅲ－１－(1)，(14)【タイ族系】

イ，脅迫非例示型……Ⅲ－１－(1)，（４－Ａ），(11)【タイ族系】，Ⅲ－１－(18)～(20)，(22)～(29)，（31－Ａ）～(36)【カム族】

ウ，嘯き例示型……Ⅲ－１－(1)～(7)，（８－Ｂ），～(17)，【タイ族系】，Ⅲ－１－（38－Ａ，Ｂ）【ヤオ族】

エ，嘯き非例示型……Ⅲ－１－(2)，（４－Ｂ）～（８－Ａ），(9)～(10)，(15)【タイ族】，Ⅲ－１－(18)～（23－Ａ），(24)～（32－Ａ），（33－Ａ）～(34)，(36)【カム族】，Ⅲ－１－(37)【モン族】

以上のことから，日本列島（南九州・九州山地及び四国山地）における分布をみると，脅迫型非例示型は南九州及び九州山地にのみ伝承されているのが特徴である。それに対して，嘯き非例示型は九州山地ではⅡ－１－(6)の宮崎県西都市八重（旧東米良村）の１例で，四国山地ではⅡ－１－(13)の高知県吾川郡仁淀町（旧池川町）椿山と，Ⅱ－１－(14)の愛媛県東温市に分布している。これもまた，「廃棄場所」の類型で指摘したように，地理的な差異を示している如くに見える。

しかし，ラオス北部に於いては（少数）民族によって伝承される型に大きな差異が認められる。たとえば，脅迫型は圧倒的にカム族に認められ，なかでも「廃棄場所」を「木」とする伝承に見られ，しかも，その総てが非例示型を示すのが特徴的である。

これに対し，タイ族系の民族では，脅迫型でも脅迫例示型がⅢ－１－(1)，(14)(15)，脅迫非例示型がⅢ－１－(1)，（４－Ａ），(11)と事例が少ない。

従って，脅迫型はカム族の間に伝承される，廃棄場所を「木」とし，非例示の形を取るツユクサの伝承であると言ってよいであろう。これは，その「廃棄場所」，脅迫非例示型の物言いが，九州山地のⅡ－１－(4)の熊本県球磨郡五木村下梶原，Ⅱ－１－(8)，(9)の宮崎県児湯郡西米良上板谷，Ⅱ－１－(10)同村小川，Ⅱ－１－(12)同村越野尾の事例と極めて精緻な一致を

見せる。九州山地の脅迫非例示型のツユクサ伝承は，カム族の伝承と深い関係を否定することはできないであろう。

それに対し，嘯き例示型は，Ⅲ－１－38－Ａ，Ｂのヤオ族の事例の一例を例外として、ほとんどがタイ族系の民族によって伝承されていることが指摘できる。しかも，その多くが廃棄場所を「木」とする事例で語られており，喩えの語り方も「伐り株，倒木の上」を例外なく「馬の背中」に喩えて，「涼しい」と逆説的に嘯くのが特徴的である。さらに，「石の上」に関わる喩えは，実態とは逆に柔らかさを表す「畳」，「枕」や暖かな「日向」などに喩えられている。

しかし，この嘯き例示型はこのカム族の間では一例も伝承されていないのが特徴的である。しかも，南九州・九州山地及び四国山地においても全く認められない。これは，脅迫非例示型の物言いの例とはほとんど対立的な在り方を示している。

一方，嘯き非例示型は，タイ族系においてもカム族系においても認めることができる。タイ族系の事例をみると，Ⅲ－１－⑵，（４－Ｂ）～（８－Ａ），⑼～⑽，⒂の９例を数える。その廃棄場所をみると，Ⅲ－１－⒂のラオ族の「川（流す）」１例以外は総て「火中（焼く）」に属している。

それに対して，カム族の嘯き非例示型の物言いは，廃棄場所を「石の上」，「木の上（伐り株，倒木）」，「川（流す）」，「土中（埋める）」，「畑の頭と足」とする事例で認められる。中でも，「土中（埋める）」が圧倒的で，22例中16例を占める。また，「火（焼く）」事例は１例もみられないことも指摘できる。

こうした，カム族の持つ嘯き非例示型は，日本列島の南九州及・九州山地及び四国山地の事例の中にも見いだすことができる。例えば，廃棄場所を「石の上」とし，「尻が火照って良い気分」という物言いをするⅡ－１－⑹の宮崎県西都市八重（旧東米良村）の事例や，廃棄場所を「木の上」とし，「眺めが良い」という物言いをするⅡ－１－⑾の宮崎県西米良村越野尾Ａ，廃棄場所を「木の上」とし，「涼かった」という物言いをするⅡ－１－⒁の愛媛県東温市の事例，廃棄場所を「一寸の土の下」とし，「死ぬ」という物言いをするⅡ－１－⒀の高知県池川町椿山の事例などとの重なりを認めることができる。

3　両地域の比較検討

⑴　物言う雑草／ツユクサ

こうしてみると，ラオス北部においては，「物言う雑草／ツユクサ」は，少数民族によって異なる特徴を示すのに対して，日本列島の南九州・九州山地及び四国山地の事例は，地域間の差異として理解でき，これらは系譜関係にあるとするのがこれまでの常識的な解釈であろう。

しかし，果たしてそのように理解するのが妥当であろうか。日本列島の南九州・九州山地及び四国山地におけるこれらの「物言う雑草／ツユクサ」の伝承は，それらが一つの「源」から派生した語りの変移であるとする理解にとどまれるかということである。

これまで比較してきた結果を見ると，脅迫非例示型のうち「木の上（伐り株，倒木）」に

ついては，南九州及び九州山地の事例とカム族系の伝承とは極めて精緻な一致が認めらる。全国的な資料の収集蓄積を待たなければならないが，今のところ九州山地で吹き溜まりの分布を見せていることを指摘できる。

それに対して，廃棄場所として「川（流す）」について語られるのは，ラオス北部ではタイ族系が圧倒的であり，しかも脅迫型では例示型１例，非例示型１例で，嘯き型は例示型が２例，非例示型が１例を数える。しかし，カム族系では嘯き非例示型が１例しか認められない。一方，南九州・九州山地及び四国山地では，総ての事例が脅迫非例示型を示し，今のところその分布は九州山地に限られる。従って，「川（流す）」事例については，タイ族系民族の伝承と結びついている可能性が強い。

つまり，日本列島の南九州・九州山地及び四国山地で語られる「物言う雑草／ツユクサ」の伝承が，それらは元が一つで系譜づけられるものではなく，ラオス北部の伝承が少数民族の違いによって異なるように，いくつもの多文化としての語りであると理解する可能性が考えられるということである。

筆者は，すでに両地域における生業基盤としての「竹の焼畑」をはじめとして，背負い籠や，稲の脱穀棒，叩き台，方形首括れ広口型魚籠などの有形民俗資料，豚骨肉食習俗を伴う動物供犠儀礼，焼米を伴う収穫祭の二重構造などの稲作儀礼の比較の議論を行ってきた。その結果，これまで南九州の地域に特徴的な民俗文化と思われてきたものが，ラオス北部をはじめとする東南アジア大陸部北部や中国南西部の焼畑少数民族の民族文化の諸要素であることを指摘し，多様な少数民俗文化の混在の可能性を主張し続けてきた。※1この「物言う雑草／ツユクサ」もまた，その中の要素として取りあげるに十分な「比較の指標としての民俗」であると考えられるのである。

(2) 物言わないツユクサ／射日神話と枯れずに蔓延る雑草

物言わないツユクサ／枯れずに蔓延る雑草については，事例Ⅱ－１やⅢ－2，Ⅲ－３で紹介したように，ツユクサが人間を脅迫したり，騙したりする物言いをしないとする焼畑民の間でも，暑さや乾燥に強く，人間が油断すると焼畑に蔓延る草だと，普遍的に語られている。

ただ，そうしたいずれの伝承の範疇にも入らない事例として，射日説話の中で語られる枯れずに蔓延る雑草／ツユクサの事例の存在は注目すべきであろう。例えば，事例Ⅲ－３－(1)ルアンナムター県プーカー郡タールワン村（モン族）では，太陽が何個も存在し暑かったため，人間が太陽を弓で射殺した，１個の太陽はヨートゥー（ラオ語名ニャーカッピー）と遊んでいて，人間に見つからずに助かり，人間を怖がって隠れる，そのため地球は闇夜になる，鶏の頭に櫛を付けて鳴かせる，その鳴き声を聞いた太陽がこの世に出てくる，だから，太陽と遊んで暑さになれていたので枯れない，太陽は１個出るようになった，鶏の鶏冠が串の形になった，鶏が太陽の出る時刻を分かるようになったと語る。これをみると，この伝承が日本神話のうちの天照神話，天岩戸神話のモチーフと酷似する神話であることが理解できる。これはツユクサの関わる部分を除けば，岡正雄が指摘しているように中国貴州省の花苗族が持つ太陽神話と同一のものである。※2さらに，岡がこの天照神話が水稲稲作文化に属すると

していることについては保留するとしても，稲作文化に属する神話であると指摘しているのは，焼畑稲作文化にとっても興味深いことである。

また，事例Ⅲ－３－⑵ボケオ県ムン郡ナムガム村（ヤオ族）でも，ソッパーン（ラオ語名称ニャーカッピー）という草が死なない理由について，昔，太陽は12個あった，暑かったのでパチンコで撃ち落とした，その１個がこの草に隠れる，人間は見つけられず太陽は天に帰る，このとき太陽の暑さに慣れたので枯れないと語る。事例Ⅲ－３－⑴と比較すると，話の展開は極めて単純であるが，人間が天から太陽を射落とすこと，1個だけツユクサに隠れること，太陽が生き残り天に復活するということ，太陽の暑さにツユクサが慣れたために枯れないと語る点ではほぼ一致する。

こうした「射日神話」を「太陽を射る話」と名付けて，膨大な資料の渉猟と，それに基づく形式分類と，その分布を研究し，文化史的な位置づけを試みた山田仁史によれば，この神話は「複数太陽型」と「天地近接型」の２つに大きく分類できるという。さらに，前者は，太陽の数によって２個から３個とする「単純型」とそれ以上の数の「複雑型」とに分類でき，「複雑型」は華南の少数民族のヤオ系，タイ系，イ系，ミャオ系の４つに分布の中心があるとしている。また，「複雑型」は「多数の太陽型」，「多数の日月（不同数）型」，「多数の日月（同数）型」の３つの亜型に類型化できるという。※3その分類に従うと，先に示したモン族とヤオ族の２つの事例は，「複数太陽型」の「複雑型」の「多数の太陽型」に当たる。山田は，この「多数の太陽型」はヤオ系諸民族とタイ系諸民族，その他の諸民族の３つに分布の中心があるとしており，Ⅲ－３－⑵のヤオ族の事例は山田の指摘したとおりである。しかし，Ⅲ－３－⑴のモン族の事例はその範囲に入ってこない。ただ，山田はミャオ族（モン族：川野注）などに多いのは，「多数の日月（同数）型」であり，「オンドリによる太陽呼び出しモチーフがきわめて発達している」と指摘している。事例Ⅲ－３－⑴は「多数の日月（同数）型」ではないものの，「オンドリによる太陽呼び出しモチーフ」を持つ点においては，モン族の特徴をよく示していると言える。

しかし，山田が示している膨大な「太陽を射る話」の事例の中には，ツユクサが登場する話は１例も出てこない。ツユクサの耐乾性獲得の理由が太陽の暑さとの関わりの中で語られる「射日神話」は，どのような分布を持っているのであろうか。残念ながら現在の時点では，先に示した２つの事例しか持ち合わせていない。ツユクサが焼畑稲作と深く関わりながら語られてきたことは，縷々述べてきたとおりであり，焼畑稲作地帯におけるさらなる資料の蓄積が必要となる。

Ⅴ　作物を殺してしまう恐怖の記憶

それでは，日本（南九州及び四国山地）やラオス北部の焼畑地帯で，共通してツユクサが「物言う雑草／ツユクサ」として，人間を脅迫し，嘯き騙すのは何故だろうか。何代にもわたって俚諺の形を取って語り継いできた背景にあるのはどのような事実なのであろうか。次に示す事例はそれを窺わせるに十分である。

1　日本の事例

(1)　熊本県球磨郡五木村下梶原２

「ハナガラ」のコバいっぱい這ったなら，稗でも粟でもせっ殺す。

(2)　高知県吾川郡池川町坪井

高知大学農学部焼畑の会の2007年の実修地では，「カマツカ」の繁茂によって播種し芽を出してある程度成長した作物が，一粒も実を付けずに全滅した。

(3)　石川県白山市（Ⅱ－１－(5)）

「ハナガラ」は，どうにもならない草で焼畑の敵（かたき）である。焼畑の中に１本でもあったら抜いて，腰の籠に入れて畑の外に持ち出して，背の高い草の上に置いたり，川に流したりした。１年目にこの草を取り残すと３年目には蔓延って，植えた小豆は全く穫れないことがある。

2　ラオス北部の事例

(1)　Ⅲ－１－⑽フアパン県トン郡タムラーニュア村（タイプアン族）

年中死なずになくならない草は，ニャーフルーンという草で，この草が生えると稲の背が低くなる。

(2)　Ⅲ－１－⒃ルアンパバーン県ゴイ郡ドゥン村（カム族）

焼畑で一番困る草はトゥゴーンという草で，稲が死んでしまうこともある。

(3)　Ⅲ－１－⒆フアパン県サムタイ郡プンシアン村（カム族）

一番大変な草は，タゴーン（ラオ語名称ニャーカップ）という草と，キッウエイ（ラオ語名称ニャーキュー）という草である。キッウエイは背が高くなる草である。

タゴーンは，節から根が出て延びて地面いっぱいに広がっていく。一生懸命取り除かないと，稲が枯れて死んでしまう。

(4)　Ⅲ－１－⒇フアパン県トン郡プエンドン村（カム族）

一番大変な草は，チッカラヨン（ラオ語名称ニャーカップ）という草である。この草が（畑に蔓延ると）本当に稲を駄目にし，稲が成長しなかったり，死んだりする。

(5)　Ⅲ－３－(2)ルアンナムター県プーカー郡タールワン村（モン族）

ヨートゥー（ラオ語名ニャーカッピー）は，いつどこに置いても死なない草で，畑に蔓延ると稲の成長に悪い草である。

これらの事例を比較すれば，その共通することは日本列島もラオス北部も共通して，ツユクサが作物の成長を阻害するだけでなく，死んでしまうということを語るのである。石川県白山市以外の日本（南九州や四国山脈）の「物言わないツユクサ／枯れずに蔓延る雑草」の事例も，言外にツユクサが作物を駄目にする恐怖を語っている。日本（南九州及び四国山脈）やラオス北部の焼畑民の間には，ツユクサがもたらすこうした作物全滅の恐怖に満ちた遠いあるいは直近の記憶が深く記され，事例に示す「物言う雑草／ツユクサ」の伝承を共有しているのも，両地域とも嘗てこの草に焼畑が全滅させられた恐怖の記憶を背景に共有しているということである。

しかし，「物言う雑草／ツユクサ」の伝承にも「物言わないツユクサ／枯れずに蔓延る雑草」にも，恐怖と憎しみと徹底した殲滅とを語りながら，一方では，「どうにもならん」，「手に余る」と語る中に，徹底的に殲滅することを諦めてた諦念が伝わってくるのもまた事実である。そこには，焼畑民の作物を害しない範囲でのツユクサとの共生の思想すらも感じられる。「一寸の雑草にも五分の魂」ということかもしれない。このことは，近代農法が雑草も害虫も作物の病気も「農薬」によって排除してきた方法，在り方とは逆方向ベクトルであることは間違いない。

Ⅵ　比較の先に－まとめと比較民俗学への見とおしとして－

以上のことから，日本列島のの南九州・九州山地及び四国山地の焼畑民もラオス北部の焼畑民も，ツユクサの持つ耐乾性の強さと繁殖力の強さに注目し，人間を騙し，愚弄し，脅迫する草として共通して語ることがわかった。しかも，日本列島の南九州・九州山地及び四国山地の伝承が，ラオス北部の少数民族のそれぞれの伝承と対応する，多文化の可能性を指摘してきた。

さらに，もう一つ，「物言う雑草／ツユクサ」の伝承が，列島の文化史的にとってどのような意味が考えられるのであろうか。これらの両地域が包含する文化を説明する概念として，中尾佐助や佐々木高明らによって唱えられた「照葉樹林文化」が知られている。その「照葉樹林文化」の生業基盤について，佐々木高明自身は近年の再考によって「有用野生植物の半栽培」，「雑穀・根栽型焼畑」であるとしている。※4ただ，筆者がこの10数年進めている南九州とタイ，ラオス，ヴェトナム北部との焼畑の比較研究から言えば，佐々木の言う「有用野生植物の半栽培」や「採集狩猟」という形は，両地域共に焼畑跡地の再生過程の利用に特徴的に見られるもので，焼畑農耕と一体として捉えるべき焼畑文化であると考えられる。※5言い方を変えれば，両地域の焼畑文化は連続性を持っているということである。その中で，「物言う雑草／ツユクサ」は，両地域の生業基盤としての焼畑農耕に附属していることは明らかである。このことは，これらの伝承が「照葉樹林文化」の文化要素として極めて重要な意味を持ち，「照葉樹林文化」の妥当性を論ずるツールとしての可能性を持っているということを物語っている。

さて，こうした事例の全ては，焼畑民の眼差しに寄り添いながら，聞き書きすることによってのみ教えてもらったことである。このように民俗学がその基本的な方法としてきた聞き書きが，まだまだ列島の文化史や，人間と生き物の関わり方，もう少し大げさに言えば人間と地球の関わり方を，豊かに示してくれていると言ってよい。さらに言えば，聞き書きで蓄積してきた民俗学の成果を，アジアの中に位置づけることによって，日本列島あるいはアジアの中における南九州という地域の文化のアイデンティティが確かなものになってくるのである。と同時に，日本列島の多文化の有り様を，赤坂憲雄が言う「いくつもの日本」を具体的に描写することを可能ならしめると言ってよい。

つまり，民俗学のフィールドでの聞き書きが，依然として「人が豊かに生きる」ための道筋を示す有効な方法を持っているということである。たとえ「アマチュア民俗学」と言われようとも，聞き書きを中心に据えた地域民俗学，あるいは地域博物館の民俗分野に課せられた課題は，まだまだ大きいということである。

これからもまた，南九州の村々の人たちに教えを請いに出掛けよう。そして，そこで教えてもらった眼差しを携えて，さらにラオス北部の焼畑民の暮らしの中を歩くことにしよう。それは，正しく楽しくてわくわくする，新たな知に巡り会う民俗の旅であるに違いないのである。そして，柳田国男が『海上の道』で遺言していった「比較の学問」としての「民俗学」への挑戦である。「黄昏の民俗学」なぞと嘆いている暇なぞはない。

注

※1　川野和昭「ラオスの少数民族の暮らしと文化－南九州との比較から－」(『黎明館企画特別展　海上の道－鹿児島の文化の源流をさぐる－』 鹿児島県歴史資料センター　黎明館　平成10年)，「もう一つの焼畑－南九州と東南アジアの竹の焼畑－」(『東北学』　第４号　東北芸術工科大学　2001年)，「焼畑の恵－焼畑その後をめぐって－」(『食と大地』 ドメス出版　2003年)，「吹き溜まる南の民具　運搬具①背負い籠」(『季刊東北学』第１号　東北芸術工科大学東北文化研究センター　2004年)，「「カタギイテゴ」の作り方と分布と文化の地域性」(『黎明館調査研究報告』第12集　鹿児島県歴史資料センター黎明館刊　平成11) 等

※2　岡正雄「皇室の神話」(『読売評論』12月号　昭和24年，『異人その他』言叢社　昭和54年)

※3　山田仁史『太陽の射手－日本・台湾と周囲諸民族における「太陽を射る話」の比較研究－』(京都大学大学院人間・環境学研究科　文化人類学講座　修士論文　自家版　1993)

※4　佐々木高明『照葉樹林文化とは何か』(中央公論社　2007)

※5　川野和昭前掲「もう一つの焼畑－南九州と東南アジアの竹の焼畑－」，「焼畑の恵－焼畑その後をめぐって－」(『食と大地』 ドメス出版　2003年) 及び「竹の焼畑と稲作儀礼と神話～竹林文化論への試み」(「アジア・熱帯モンスーン地域の地域生態史の総合的研究：1945-2005」2003年度報告書』，『同　2004年度報告書』，『同　2005年度報告書』(大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所　2004年，2005年７月，2006年９月)

本文は，大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域の地域生態史の総合的研究1945－2005」(プロジェクトリーダー秋道智彌) 及び同研究所研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき－ユーラシア農耕史と環境－」(プロジェクトリーダー佐藤洋一郎) における川野のラオス現地調査の成果に大きく負っている。

また，本文は，平成21年10月５日 (日)，熊本大学で行われた第60回日本民俗学会年会において同題で発表したものに，平成21年12月から平成22年１月にかけて行った，総合地球環境学研所研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき－ユーラシア農耕史と環境－」(プロジェクトリーダー佐藤洋一郎) における川野のラオス現地調査の収集資料を追加して文章化したものである。

追記

本文を脱稿後，脇田雅彦・脇田節子氏の「ツユクサの伝承－岐阜・愛知両県をめぐって－」(『民具マンスリー』第42巻３号　神奈川大学日本常民文化研究所　2009年６月10日発行) を目にすることができた。そこには，「物言う雑草／ツユクサ」や「物言わないツユクサ／枯れずに蔓延る雑草」の事例が豊富にあげられ，廃棄の場所として「石の上」，「木の上」，「川 (流す)」，「焼く」，「土中」の５つの類型の存在を指摘されている。しかし、南九州・九州山地や四国山地には見られなかった「嘯き例示型」の伝承の存在があげられている。それは，「木の株の上に乗せたら「馬に乗ったみたいや」」という例 (『荘川村の民話　昔話編』) と，「木ノ株タノ上へ　コオヤッテ　シバッテオクト　ウマニ乗ッタ　ウマニ乗ッタテ」(豊根村の熊谷ももえさん) の２例である。これは、全くラオス北部のタイ族系の伝承とほとんど同一であることには驚かされる。

さらに，脇田氏らの指摘の中で重要なことは「山間部から平野部へと伝承内容が同じように希薄化してゆく」という点である。これは，紛れもなく「物言う雑草／ツユクサ」の伝承が，「山」や「山畑」，「ナギハタ」という焼畑農耕に随伴した伝承であることを意味している。

ただ，この伝承の原型を「枯レナイ草」という観察描写 (川野の「物言わないツユクサ」:川野注) を序章とし，「涼シイ」・「馬ニ乗ル」と呟き出す (川野の「物言う雑草－嘯き非例示型・嘯き例示型」:川野注) を第一段階，「腰ヲモンデクレテ有り難い」と呟く (川野の「物言う雑草－嘯き非例示型・嘯き例示型」:川野注) を第二段階，「骨ニナッテデル」・「ヒトフシ残ル」という恨み節 (川野の「物言う雑草－脅迫型」:川野注) を第三段階，「一寸ノ土」(川野の「物言う雑草－嘯き非例示型：川野注) で一件落着を第四段階とした，話形の系譜論については今のところその是非を保留しておきたい。

しかし，脇田氏の実践されている聞き書きによる資料の収集と，その資料に基づいて自分の考えを構築されている姿勢は，故小野重朗先生の姿と重なる。柳田が言った「比較の学問」を実践していく上であらためて全国的な資料の収集とその比較の重要性を痛感させられた。それとともに，日本の文化史を考えていく上で民俗学の有効性を思わずにはいられない。

物言う雑草分類一覧

表Ⅰ　日本の事例

□は脅迫型を示す

	村落名	民族名	植物名	廃棄場所　A（石の上）				廃棄場所　B（木の上）				廃棄場所　C（川）				廃棄場所　D（火）				廃棄場所　E（土の中）				廃棄場所　E（畑）			
				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度			
				実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘
1	鹿児・佐多打詰	日本	ツユクサ	石の上		枯死	降雨・再生増殖																				
2	熊本・五木出羽	日本	ハナガラ									川に流す		流れ去る・死	引抜き・再生増殖	焼く		焼死	生き残る・再生増殖	土中に埋める		死ぬ	掘り返し・再生増殖				
3	熊本・五木梶原1	日本	ハナガラ													焼く		焼死	生き残る・再生増殖	土中に埋める		死ぬ	畑の耕耘・再生増殖				
4	熊本・五木梶原2	日本	ハナガラ	石の上		枯死	降雨・再生増殖	木の上		枯死	風吹き落下・再生	川に流す		流れ去る・死	引抜き・再生増殖	焼く		焼死	生き残る・再生増殖	土中に埋める		死ぬ	掘り返し・再生増殖				
5	熊本・五木栗鶴	日本	ハナガラ									川に流す		流れ去る・死	引抜き・再生増殖												
6	宮崎・西都八重	日本	ハナガラ	石の上		枯死	気分快適・生存																				
7	宮崎・西都上揚	日本	ハナガラ									川に流す		流れ去る・死	踏み潰し・再生増殖	焼く		焼死	踏み潰し・再生増殖								
8	宮崎・西米良板谷1	日本	ハナガラ	石の上		枯死	落下・再生	木の上／枝		枯死	落下・再生																
9	宮崎・西米良板谷2	日本	ハナガラ	石の上		枯死	降雨・再生増殖	木の上		枯死	風吹き落下・再生	川に流す		流れ去る・死	引抜き・再生												
10	宮崎・西米良小川	日本	ハナガラ					伐り株		枯死	風吹き落下・再生					焼く・ヨセヤキ		焼死	踏み潰し・再生増殖								
11	宮崎・西米良越野尾1	日本	ハナガラ					木の上		枯死	眺め良い・平気	川に流す		流れ去る・死	引抜き・再生												
12	宮崎・西米良越野尾2	日本	ハナガラ					木の上		枯死	風吹き落下・再生	川に流す		流れ去る・死	引抜き・再生	焼く		焼死	踏み潰し・再生増殖								
13	高知・池川椿山	日本	カマツカ													三千日の日照り		枯死	火照り・気分快適・生き残る	一寸の土の下		生き残る・再生増殖	怖い				
14	愛媛・東温市	日本	ツユクサ					木の枝		枯死	涼しかった・生延び																
15	静岡・静岡井川	日本																									

表Ⅱ　ＬＡＯ北部事例

□は脅迫型を示す

	村落名	民族名	植物名	廃棄場所　A（石の上）				廃棄場所　B（木の上）				廃棄場所　C（川）				廃棄場所　D（火）				廃棄場所　E（土の中）				廃棄場所　E（畑）			
				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度			
				実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘
1	ルアンパバーン・コックチン	タイルー	ニャーカップ	石の上	骨の上	枯死	気分快適・生存	伐り株の上	馬の背中	枯死	気分快適・生存	水の中・川に流す	舟の上	流れ去る・死	落ち・再生増殖					土中に埋める		生き埋め・死	生き残る・再生増殖				
2	ルアンパバーン・ヴッエン	ラオ	ニャーカップ					伐り株の上	馬の背中	枯死	気分快適・生存					焼く		焼死・熱射	寒い・生存増殖								
3-A	ブアバン・ナースン	タイデン	ニャーカップ					倒木の上	馬の背中	枯死	気分快適・生存																
3-B	〃	〃	〃					伐り株の上	(馬の背中?)	枯死	背が伸び成長																

	村落名	民族名	植物名	廃棄場所　A（石の上）物言いの態度				廃棄場所　B（木の上）物言いの態度				廃棄場所　C（川）物言いの態度				廃棄場所　D（火）物言いの態度				廃棄場所　E（土の中）物言いの態度				廃棄場所　E（畑）物言いの態度			
				実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘
4-A	ツアパン・ボンバオ	タイデン	ニャーカップ					伐り株の上	馬の背中	枯死	（気分快適・生存）	水（川）に捨てる（流す）		流れ去る・死	流れない（寄岸・再生増殖）	火（焼く）		焼死	燃えない（生存・繁殖）								
4-B	〃	〃	〃					伐り株の上	馬の背中	枯死	（気分快適・生存）					燃え残り焼きの火中		焼死	冬の日向ぼっこ・生存増殖								
5	ツアパン・ナーメーンタイ	タイダム	ニャー・カップ					伐り株の上	馬の背中	枯死	（気分快適・生存）					燃え残り焼きの火中		焼死	好奇心・安寧・生存増殖								
6	ツアパン・タオ	タイデン	ニャー・カップ					倒木の上	馬の背中	枯死	（気分快適・生存）					燃え残り焼きの火中		焼死	冬の焚き火当たり・生存増殖								
7	ツアパン・ナムクリン	タイデン	ニャー・カップ					倒木の上	馬の背中	枯死	（気分快適・生存）					燃え残り焼きの火中		焼死	冬の日向ぼっこ・生存増殖								
8 A	ツアパン・ナラ	タイデン	ニャー・カップ													燃え残り焼きの火中		焼死	冬の日向ぼっこ・生存増殖								
8 B	〃	〃	〃													燃えている火	馬の背中	焼死	気分快適・生存）								
9	ツアパン・バオニュアン	タイデン	ニャーカップ					倒木の上	馬の背中	枯死	（気分快適・生存）					燃え残り焼きの火中		焼死	冬の焚き火当たり・生存増殖								
10	ツアパン・レン	タイデン	ニャー・カッピー					倒木の上	馬の背中	枯死	（気分快適・生存）					燃え残り焼きの火中		焼死	冬の日向ぼっこ・生存増殖								
11	ツアパン・タムラ・ニュアー	タイアン	ニャーフルーン	石の上	枕の上	枯死	気分快適・生存	伐り株の上	敷き布団の上	枯死	（気分快適・生存）	水（川）に捨てる（流す）	沢山の町に行く	流れ去る・死	旅行をする・気分爽快・生存	火（焼く）		焼死	何回も生まれ変わる・生存増殖	除草具で叩く（地面）		傷つき（立ち上がれない）	町の王になる・再生増殖				
12	ウドムサイ・ナモン	タイルー	ニャー・カッピー					伐り株の上	馬の背中	枯死	気分快適・生存																
13	ウドムサイ・ティ・ンタイ	タイルー	ニャー・カッピー	石の上	日向	枯死	日向ぼっこ・気分快適・生存増殖	伐り株の上	馬の背中	枯死	涼しく気分快適・生存																
14	ボンサリー・パクパ・ン	ジオ	ニャー・ペッ					伐り株の上	馬の背中	枯死	涼しく気分快適・生存					燃え残り焼きの火中	玉座	焼死	王様になる・生存増殖								
15	ボンサリー・・カナ	ラオ	マッバオ					伐り株の上	馬の背中	枯死	涼しく気分快適・生存	川に流す		（寄岸・再生増殖）	死ぬ	燃え残り焼きの火中	日向	焼死	冬ひの日向ぼっこ・生存増殖								
16	ボンサリー・ナーカム	タイダム	ニャーカピ・・					伐り株の上	馬の背中	枯死	涼しく気分快適・生存	水	舟に乗る	流れ去る・死	旅行をする・気分爽快・生存	燃え残り焼きの火中	日向	焼死									
17	ボンサリー・ソプナ・ン	ラオ	ニャーカッピー					伐り株の上	馬の背中	枯死	涼しく気分快適・生存																
18	ルアンパバーン・ドーン	カム	トゥピ・・ン					伐り株の上		枯死	再生増殖									土の上		再生増殖	死ぬ				
19	ルアンパバーン・パッサブーイ	カム	チットサンカラヨン					伐り株の上		枯死	生存									穴に埋める		再生増殖	死ぬよ				
20	ルアンパバ・・ン・パッカーム	カム	キッシンカラミト・					伐り株の上		枯死	開花・結実・生存・生増殖									土の上		再生増殖	死にます				
21	ツアパン・ブンシアン	カム	タゴ・・ン					倒木の上		枯死	気分快適・再生増殖									平地		再生増殖	死ぬ				
22	ツアパン・プエンドン	カム	チッカラヨン					倒木の上		枯死	開花・結実・生存・生増殖									（地面）		再生増殖	死ぬ				
23-A	ツアパン・サントン	カム	チッタゴーン					伐り株の頭（上）		枯死	開花・結実・生存・生増殖									土の上		再生増殖	腐る・死ぬ				
23-B	ツアパン・サントン	カム	チッタゴーン					倒木の上		枯死	繁殖・生存・生増殖																

	村落名	民族名	植物名	廃棄場所 A（石の上）				廃棄場所 B（木の上）				廃棄場所 C（川）				廃棄場所 D（火）				廃棄場所 E（土の中）				廃棄場所 E（畑）			
				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度				物言いの態度			
				実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘	実	嘘
24	ウドムサイ・ナナンビー	カム	チンカイコル					伐り株の上		枯死	開花・結実・生存・繁殖									地面		再生増殖	死ぬ				
25	ウドムサイ・バケメン	カム	ゲントルー					倒木の上		枯死	地面に種子を落し生存・増殖									地面の窪み		再生増殖	死ぬ				
26	ウドムサイ・ホリイレンム	カム	タゴーン					伐り株の上		枯死	地面に落種子・生存・繁殖									地面		再生増殖	死ぬ				
27	ウドムサイ・ノンタオ	カム	タゴン					木の上		枯死	地面に落種子・生存・繁殖									土の上		再生増殖	死ぬ				
28	ウドムサイ・ケオ	カム	タゴン	石の上		開花・生存		伐り株の上		枯死	結実・再生増殖																
29	ウドムサイ・ナムコンム	カム	コロンブアー					伐り株の上		枯死	開花・結実・繁殖・生存・増殖	谷・川沿い		再生増殖	死ぬ					土の上		再生増殖	雷害・埋蔵・脅迫				
30-A	ボンサリー・モッチャラ・・	カム	プレボ																					畑の足：下側縁	畑の下側・外に延びる	畑の中に延び，実害有り	畑の下・外に延び，実害無し
30-B	〃	〃	〃																					畑の頭：上側の縁	畑の下・中に蔓延り，実害有り	畑の上に延び，実害無し	畑の上に蔓延り，実害無し
31-A	ボンサリー・オムカネン	カムクエン	キッツンコロワ・・					倒木の上	下向きに垂れ下がる	枯死	結実・繁殖									地面の窪み		再生増殖	死ぬ	畑の頭：上側の縁	畑の中に蔓延り，実害有り	畑の上・外に延び，実害無し	畑の中に蔓延り，実害有り，
31-B	〃	〃	〃																					畑の足：下側縁	畑の中に蔓延り，実害有りに変	畑の下・外に延び，実害無し	畑の中に蔓延り，実害有りに変
32-A	ボンサリ・・・ピアレッ	カム	テンカラッコ・・ル					倒木の上	下向きに垂れ下がる	枯死	結実・繁殖									地面の窪み		再生増殖	死ぬ				
32-B	〃	〃	〃					伐り株の上	下向きに垂れ下がる	枯死	結実・繁殖																
33-A	ルアンナムタ・・・トントーン	カム	ニャートゴン					伐り株の上		枯死	結実・再生増殖									地面		再生増殖	萎れて死ぬ				
33-B	〃	〃	〃					燃え残りの倒木		枯死	地面に落種子・再生増殖																
34	ルアンナムタ・・ブ・・レット	カムユアン	チッタゴ・・ン					倒木の上		枯死	結実									地面		再生増殖	萎れて死ぬ				
35	ルアンナムタ・・・ナムシン	カムクエン	ユッタゴーン					倒木の上		枯死	結実									地面		再生増殖	萎れて死ぬ				
36	ボケオ・ドンミサイ	カム	チッタゴーン					倒木の上		枯死	結実									地面（窪み）		再生増殖	萎れて死ぬ				
37	ルアンナムタ・・・タールリン	モン	ヨートゥー					倒木の上		枯死	鳥を騙し種子を運ばせ，再生増殖																
38-A	ブアパン・ホワイトン	ヤオ	（草）					伐り株の上	椅子の上	枯死	気分快適・再生増殖																
38-B	〃	〃	〃					倒木の上	馬の背中	枯死	気分快適・再生増殖																
39	ルアンナムタ・・・サムソン	アカ	トークラソ									お湯		死ぬ	死なない	燃やす		焼死	死なない								

（注）　は脅迫型を示す。